九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

メーヌ・ド・ビラン『思惟の分解論』における能動性の視点

下村，英視

https://doi.org/10.15017/1397656

出版情報：哲学論文集. 18, pp.69-90, 1982-09-20. 九州大学哲学会
バージョン：
権利関係：

メーヌ・ド・ビラン『思惟の分解論』における能動性の視点

下村英視

一　序

私たちが扱おうとするメーヌ・ド・ビランの『思惟の分解論』 Mémoire sur la décomposition de la pensée は、一八〇二年末のフランス学士院第三クラス[1]によって提出された「思惟能力を分解すること及びそこに認識する必要がある要素的な諸能力を示すこと」[2]という問題に答えた受賞論文である。

ところでビランは、これに先立って、やはり同じ学士院が募った懸賞論文[3]に、『習慣論』 Influence de l'habitude sur la faculté de penser という論文で受賞している。ビランが明らかにするところによれば、ビランはこの『習慣論』においてすでに私たちの能力を受動的な能力と能動的な能力とに分割することに到達した[4]。そして、この区別は、後のビランの思索において保持されることになる。しかしながら、そこでの考察は、感覚性（受動）及び運動性（能動）[5]の諸現象を生理学的

関係下において扱ったものでしかなく、当時はまだ、「脳の運動において思惟を研究することができると信じていたし、またボネ、ハートレー及び他の生理—物理学者 physiologistes physiciens の例にならうことができると信じていた」[4]ことをビランは告白する。これに対して、前述の『思惟の分解論』を書くきっかけとなった学士院の問題に取り組む時点でのビランには、「純粋に物理的な説明の空虚さ」[4]が自覚されており、このときビランの取る方法は、意識の諸現象を意識の内面において観察するということであった。ビランの新たな仕事[6]を導くのは、外的あるいは物理的経験とか想像ではなく、内的経験あるいは反省であったのである。[4]そしてビランは、この方法によって、人間の思惟能力により深められたより確かな基礎を与えることができたと確言するのである。[7]

こうして、内的観察あるいは反省の方法によってとらえられる意識の事実に根拠をもつ分析は、思惟能力の生理—物理学的説明と根本的に異なった分析として遂行されることになる。そしてこのことによって、自我の能動性、あるいはそのエレメントをなす「意志」がはじめて厳密にとらえられる。このエレメントが何よりもまして重要であるのは、ビランによって「一切の認識は、もちろん自我の認識もそこに含まれるのだが、超感覚的で超器官的な能動性 une activité hypersensible et hyperorganique のはたらきだけから、言いかえれば、意志するという第一の活動だけから（中略）、始まることができたのだ」[8]と言われることから明白である。[9]私たちは、認識という固有に人間的活動の営みにおいて強調されるこのような能動性の視点を、ビラニスムの特徴的なものとして本論で検討してゆきたい。そこで中心的な議論をなすのは自我の活動性[10]であるが、これを、感覚能力とそれに密接に関係する観念の産出の問題についてビランが行なう分析を手掛りにして見てゆく。そして、私たちのこの試みが、妥当なものであることを示すためにも、まずここで、『思惟の分解論』の構成について触れておく必要があるだろう。

『思惟の分解論』は大きく二部に分かれている。第一部は、「いかにして思惟は分解されるべきか」という表題が与えられており、以下のことを目的とする。すなわち、提出された問題の意味を確定すること、その対象を決定すること、その諸

限界を限定すること、その十全的な解明に最もふさわしい分析方法を見出すこと、である。[11] したがって、第一部は、方法論として特色づけられることになる。そして、『思惟の分解論』全体のおよそ四分の一を占めるこの第一部に続いて、第二部は、「思惟の要素的な諸能力とはどのようなものか」というテーマのドに、ほぼ均等に分割されている三つの部門から構成される。第一部門は、受動的な感覚性と意志的な運動性という二要素を取り出すことに当てられる。前者については、「生理学的観察と直接的な感情とに訴える」ことによって、後者については、「やはり生理学的諸事実という同じ秩序に支えられて、しかしより反省された視点に接近する」ことによって、探求が展開される。[12] 第二部門では、受動性と能動性という二つの機能が結びついている諸感覚能力 sens[13] の十全的な分析が行なわれる。ここでのビランの探求は、各々の感覚能力において、二つの機能から産み出されるもの（観念）を分解する décomposer ことにある。ここでは、感覚的な要素と反省的な要素の組み合わせの多様な秩序が記される。そして、このような方法によって、私たちの知性を構成する諸要素を見出すことができ、それらの要素間の実在的な分割を行うことができると、ビランは考えた。[14] 続く第三部門では、これまでの考察から諸要素がすでに与えられているから、高度な知的所産に至るまでの分析が可能であり、これが包括的に扱われる。つまり、思惟能力はその一般的なはたらきの中で考察され、知性の受動的秩序と知性の能動的秩序に区別され、後者については、さらに三つのクラスに分けられる。そして、ビランの分析は、これをもって完結することになる。

私たちは、第二部第二部門を中心に議論を行なう。それは、感覚能力の分析と切り離されない仕方で演繹される観念に、ビランの独自な視点、つまり前述の自我の活動性の視点が最もよくあらわれていると考えるからである。そして、ビラン自身が主題的に扱っている聴覚、視覚、触覚という感覚能力について、私たちもまたその考察をたどってみたい。そこにおいてビランの行う分析は、観念という固有に人間的な所産の身分を正確な仕方で私たちに明らかにしてくれ、またそれを通じて、私たちはビランの核心の思想に触れることができると思われるからである。

二　感覚能力の分析と観念の産出

一、聴覚の場合

聴覚は、印象という外的な原因の外では決してはたらかない[15]。また、音の印象を私たちは受け取っているのであり、その限り聴覚においては受動性が支配的であるように思われる。しかし、私たちには「聞き取るという能力」[16] une puissance d'audition がある。すると、聞き取られた音は、一方では、この能力の能動性の所産であるように思われ、他方では、音を発する外部の原因がその能力に印象を与えるように思われる[17]。つまり、この問は、聞き取るということに見られる意志作用の適用が最初にあるのか、それとも意志作用の適用は諸印象に多かれ少なかれ依存しているのか、ということにある。

ビランによれば、諸印象の外では、聴覚器官を作用項としてもつような活動ないし努力の感情など決してない[17]。それゆえ、聞き取ろうとする努力は、現前している印象がない場合には、展開されることができず、そういう印象をエレメントとしてもつような複合体（感覚様態[18]の観念）を形成しえない。したがって、印象という外部原因に注目する限り、聴覚は受動的な感覚能力として性格づけられることになる。しかしながら、ビランは、ただ聞くだけという聴覚を考えない。聞き、繰り返し、言いなおすという活動が、聴覚という感覚能力に属している[19]。ビランは、これを、「意識の感覚能力」le sens de la conscience とか「悟性の感覚能力」le sens de l'entendement とも呼ぶ[19]が、このことによって特徴づけたいのは、発声と結びついた聴覚という感覚能力のおかげで、各々の個人は「自分自身の諸活動を把握することができ、その活動の諸観念を自分でつくることができ、自分を反省することができ、自分自身を思惟することができる」[19]ということである。

そこで、聴覚におけるこのような機能の実現を可能にしている構造を見なければならない。ビランによれば、聞き取るということの知覚性は、直接的な諸印象を受け入れる受動的感覚能力にではなく、聴覚を刺激する音を内的にくりかえしかつまねる能動的器官によりよく帰される[20]。音の振動が聴覚（さらにその能動器官）に伝えられると、発声機構 l'instrument

vocal」は外からの音をくりかえし、これによって聴覚は、二つの印象（直接的、反省的）によって刺激されることになる。[21] そしてこの二重化は、結果として次のことを導く。つまり、「外部原因が活動するのをやめても、同じ決定がやはり実現されることができ、器官は新たに内から外へと印象づけられ、しかも外部のいかなる力も感覚様態を産み出すことに協力しないにもかかわらず、感覚様態は十全的 complete となる」。[22] それゆえまた、反省的印象に注目する限り、外部の音を聞き取るということは存続する。ここでビランは、「内部の音の中に、集中したまま残っている」能力としての「反省」を見出している。[23]「聴覚及び発声の二重のはたらきにおいて、メロディーはハーモニーを準備し、今度はハーモニーがメロディーの基礎として役立つ」[24]と言われるように、直接的印象に続く注意は、聴覚という感覚能力とともに、メロディーという様態の複合が実現される動因 le mobile をなし、この複合的様態からハーモニーという内的能動的様態を抽象しかつこれに結びついている反省は、メロディーを再生する原因 la cause efficiente である。そして、このような構造に支えられて、「いわば自分固有の質料と形相とを自分自身の内にもっている十全的な観念がある」。[23]

こうして、能動性をその本質とする発声・聞き取り活動によって特色づけられる聴覚は、基本的に受動性の介在がきわめて低い次元においてしか生じない感覚能力であると言うことができる。きわめて端的なビランの表現に従えば、「子供は生まれるとすぐに、自分がまだ決して聞いていない物音に対して動きまわる」[25]と言われるように、どこまでも受動性のレベルに固執しようとすれば、それは、なるほど刺激を被ってはいるが、聞くということが成立していない状態に留まることでしかないのである。[26] このようにして結局、聴覚の場合、観念の産出は能動性ということによって性格づけられねばならず、したがって受動性の側面に基礎づけられた観念は認められない。

二、視覚の場合

ビランによれば、個人は、目を閉じたり開いたりする運動、とりわけ意志的に開くという運動のもとに、自分自身の諸々の様態を産み出したり無くしたりすることを、とらえることができる。[27] ここでは、個人は、目を閉じたり開いたりする活動

を意志することによって、諸様態を変化させることを自分の力に帰し、いつでもこの変化を意志することができる。[27] それにもかかわらず、この意志の活動が瞬間的であるのに対して、その所産（視覚的な諸様態）は持続的であることから、両者の間にはっきりした均衡は認められず、それゆえ、ここに原因結果の関係をとらえることはできない。[28] では、視覚においては個人に能動性は全く認められないのかというと、ビランはそうとも考えない。視覚の活動は、まぶたを上下させ、それによって光の印象を変化させるという運動に限られず、他に、適切な点に光線を収斂させ判明な視像をつくるために、眼球器官を支配するのに役立つ多くの運動があり、なるほど今ではこれらの運動・活動が感じられないほど容易であるとしても、この段階に至る以前は、努力をもって遂行されねばならなかった。この努力という感情が、単純な光の印象（受動）といっしょになって、「真なる複合的感覚様態」 une véritable sensation composée を構成することができ、ここにビランは、能動的な視覚をとらえている。[29] 目を凝らして何らかの対象をみようとする活動は、眼球運動をもたらし、これによって眼球にある様態の変化が刻印されることになる。しかも、この場合の様態の変化は、判明な知覚を用意するものであり、この知覚は、運動性から切り離された場合にもたらされる受動的視覚、つまり光の印象にのみ従って生き生きとしていたりそうでなかったりする内的感覚様態 sensations intérieures とは区別される。[30]

このように、視覚の能動的側面と受動的側面とが明らかにされる一方、ビランは、視覚の表象的性格について、厳密化してゆく。視覚における知覚された様態は、単純な受動の性格も、個人が努力主体としての自分に帰することができるような能動の性格も、持っていない。[31] ビランがここで注目するのは、「何らかのものがこの（眼球）器官の内にあるいはこの器官によって表象されている」[32]ということであって、これをビランは、視覚という感覚能力に固有な「表象機能」と呼ぶ。そして、表象されている何らかのもの、これらはビランによって対象とか像と言い換えられるが、これらは、「自我ではないし、運動する力とか感覚する能力というようなものとして自我に帰されることはできない。」[32] したがって、視覚において知覚された様態については、なるほど受動性が完全に支配的というわけではないにしても、表象という点に注目する限り、そこで

特色づけられるべきは受動性ということになる。なぜなら、表象の根本的な主導権は外部原因にあり、他方、器官的運動をなす力は視覚の能動性を補うということにおいてせいぜい自分の印象を保たせることしかできないからである。[32] それゆえまた、表象的性格は、感覚性の受動 les affections と異ならないと言われてよい。[33]

こうして、視覚という感覚能力において知覚されているのは、私たちのまなざしに像、あるいは像として姿をあらわす対象でしかなく、これは自我の活動を直接的原因とするものではない。またビランは、「私たちの外部に属しているものに向う」表象、想像と、「私たちの内にあるものあるいは私たちであるものに向う」反省、覚知とを、対立するものとして峻別する。[34] この対立が、感覚性と意志性、あるいは受動性と能動性という対立に、対応することは明らかである。それゆえ、もし視覚という感覚能力をモデルとして人間知性を解明しようとすれば、それは不完全で誤った分析とならざるを得ない。なぜなら、このことは能動性の側面を十分にとらえ得ない分析に終わってしまうことは疑えないからである。[35]

では、以上のように受動性ということによって特色づけられる視覚という感覚能力においては、感覚性の諸受動しかなく、観念の産出はないのだろうか。しかし、色という感覚的な様態の知覚をもつ私たちは、色の観念を持つと言われてもよいのではないかと思われる。だが、このことは、視覚についての分析からだけでは論証されない。このためには、次に見る触覚についての考察が必要である。

三、触覚の場合

ビランによれば、「延長」の観念は、意志的運動においてもたれる抵抗の知覚から演繹される。手、指という以上に、抵抗する点をとらえるための概念としてビランが持ち出す「鋭くとがった爪」[36] これが反復的な能動的活動によって動くことができるという場合には、この活動からとられる観念とは、「くりかえされる単一性」及び「抵抗する諸々の多数性」の観念である。[36] ここにはまだ、「延長」の観念はない。ところが、爪であれ指であれ手であれ、このような器官が適用されている項（抵抗する項・対象）を連続的にすべるようになぞる能力を持っている場合には、抵抗する諸々の点は連続している。

ここで、抵抗する項は「延長的なもの」としてあらわれることになる。しかも、ここで抵抗の知覚された連続性を決定するのは、時間的にひきのばされた活動における自我の連続性である。つまり、「抵抗の知覚された連続性は、自我の連続性という内的実在性に必然的に基礎づけられている」[37]のである。

このように、「延長」の観念自体、私たちの意志的活動から演繹されるのだから、延長や点からつくられうる無限な組み合わせあるいは様々な形は、私たちの自由な創造の所産である。[38]言い換えれば、形の観念は、「第二性質」と呼ばれるような諸々の性質の観念のようには、感覚される諸々の複合体（外部対象）から抽象的に引き出されたのではない。そうではなくて、触覚という感覚能力の能動性に、あるいはこの感覚能力が対象をなぞるという仕方で活動するということに、諸々の形の諸観念を創造するということの「モデル」はとらえられねばならないのである。[39]

こうして、無数の形の観念は、私たちの運動・活動の所産であると言える。しかし、熱さとか冷たさといったいわゆる「第二性質」[40]をあらわす感覚様態については、形の観念の場合と同様な仕方で取り出されることはない。そして、ビラン自身これらの感覚様態について、その演繹の過程を問題としえず、これらが内的な諸受動 les affections internes であることを認めている。[41]その限り、これらの感覚様態は、受動性の側面からしかとらえられない。ところがビランは、ここに能動性の視点を導入する。それは、ちょうど「第一性質」が自我の努力に対して抵抗する力である物体[42]から切り離されない属性として帰される[43]ように、「能動的触覚は、個人をただ外部抵抗力との直接的関係に置き、これによって、（中略）物体の第二性質と言われる受動的諸様態に、外部原因を与える。」[44]ビランの主張は、触覚の能動的活動によって、結果としての感覚様態に対応する原因がとらえられる、ということにある。なるほど、第二性質は、物体の中にあるようないかなるものにも似ていないことを、ビランは認める。[45]しかし、ビランによれば、第二性質とは「それら（第二性質）の原因に記号として役立つ結果あるいは感覚様態」であり、「記号 le signe と意味されたもの la chose signifiée、結果と原因との間に何らかの類似があることは必要ない」[45]とされる。こうして、能動的触覚という立場から、感覚様態の原因がとらえられることにより、

感覚様態の観念の産出が実現される。

ところで、通常第二性質とみなされる色[46]の場合どうだろうか。色は視覚によって得られる感覚様態であるが、これは観念たりうるのであろうか。もし、そうだとすれば、それはいかにしてか。この問に答えるものは、やはり「能動的触覚」という概念である。能動的触覚は、先に見られたように、熱さ冷たさの感覚様態をもたらすものとしての外部原因を与えるが、また、色のような感覚様態にも「固定された対象」un objet fixe を与える。[47]『心理学の基礎』によれば、感覚様態を自分の器官に関係づけることは「様態的帰属」、対象に関係づけることは「客観的帰属」と呼ばれる。[48]この規定にならえば、色は対象に客観的に帰属させられ、熱さ冷たさは私たちの身体器官に帰属させられることになる。

色という感覚様態を問題としている私たちは、「客観的」と呼ばれる帰属関係について考える必要がある。ビランは次のように言う。「触覚及び意志的運動のはたらきが、抵抗を自我の外に局在化したとするならば直ちに、また三次元的延長あるいは抵抗する連続体、可感的世界のあらゆる面、つまり色、触知的性質、音、匂、味すらをも（中略）決定したとするならば直ちに、一切（可感的世界のあらゆる面）は、抵抗する連続体に一致し、重なり合うことであろう。」[49]あるいは、「私たちが客観的帰属と呼ぶこの種の局在化は、他の外部感覚能力の同時的なはたらきに結びついた意志的な運動及び触覚のくりかえされた経験の所産である。」[50]色の感覚様態の場合も、能動的触覚なしには、「いかなる対象にも結びつくことなく、私たちの疲れた目の前を時としてただよっている色のついた雲状のもの」[50]と異ならない。しかし、触覚のはたらきが、この雲状のものを固定し、基礎 base を与え、私たちが動きまわっている空間の中で決定された方向やへだたりを割り当て、これによって客観的帰属を実現する。[50]このように語ることによって、ビランは、私たちにとらえられている色の感覚様態が外部物体という対象に帰属することを確定しようとしている。しかしながら、熱さや冷たさの感覚様態を私たちにもたらす原因としての外部物体がたてられ、結果としての感覚様態が私たちの器官に帰属させられた様態的帰属の場合のようには、因果関係の樹立は、客観的帰属については明らかにされていない。[51]したがってまた、色を対象に帰属させることの根拠がどれほど

確かなものであるのかという点については、疑問が残る。[52] それゆえ、ビランに従えば、客観的帰属の成立において、色の感覚様態も、単なる感覚性の受動ではなく、観念としての資格を有することになるが、しかし能動的触覚の介在にみる能動性の役割に注目する限り、様態的帰属においてとられる観念とは区別されねばならない。

四、能動性と受動性

こうして私たちは、能動性と受動性の観点に立つこれまでの考察から、観念を三つに区別することができるように思われる。ひとつに、能動性によって性格づけられるもの。聴覚による観念がこれである。他に能動性を優位とするが接触によって作用を被るという受動性のもとに成りたつ観念。触覚による観念。最後に、受動性を優位とするが能動的触覚のおかげで帰属対象を得ている観念。視覚による観念がこれである。

この区別は、それまでの形而上学においてうちたてられてきた「感覚的秩序」と「知的秩序」の区別と決定的に異なる。[53] 後者の区別が、二つの秩序のどちらかに重点を置こうとするのに対して、ビランはこれを認めず、意志性と感覚性あるいはこれまでの議論に則せば能動性と受動性の二つのエレメントがいかなる観念にも認められねばならないと考える。ただ、能動性と受動性とが果たす役割、あるいはそれぞれが占める割合に応じて、知的な観念と感覚的な観念の段階的な区別が生じるにすぎない。それゆえ、「知的な」という形容語が意味するのは、「高次の能動性」activité supérieure という性格に他ならず、「感覚的なもの」と全く異なった本性ということではない。[54] 事実、ビランは、観念の産出が、感覚能力のはたらきを通してなされることを克明に追ったわけであり、これは、私たちが今まで見てきたことから明白である。

したがってまた、ビランは、『思惟の分解論』第二部第三部門で「知的な能動的秩序」を三つのクラスに分けるが、このときそれぞれのクラスに対応する感覚能力は、視覚、触覚、聴覚（発声と結びついた聴覚）である。[55] そして、これらの内最も能動性の高い聴覚から得られる観念が、「思惟の内にある。」[56] ここで記号という概念を導入すれば、聴覚に対応する言語記号は、視覚に対応する表象記号（色や視像の記号）や触覚に対応する触知記号（形や温度の記号）よりも、高度な知的操作

に、言い換えれば、ビランがその説明に多くの頁を当てている推論[57]に、適しているのである。すでに見られたように、聴覚が他の二つの感覚能力にくらべて最も高い能動性の位置にあったことを考えると、より能動的であることがより知的であることに正確に対応していることが、また明らかとなる。したがって、ビランにおいては、感覚的なものから知的なものへという連続性があり、この連続性及び知的なもののより高度な発展ということを支えているのは、基本的に能動性の視点である。私たちは、私たち自身の能動性を原理として、知的な発展を行うことができるのである。

三　カテゴリーの問題

能動性の視点が確定された今、私たちは、最も能動的なものとされた聴覚から取り出されるカテゴリーについて検討の場を設けたい。ビランは、聴覚と発声のはたらきから派生する観念としてのカテゴリーの問題を考えている。カテゴリーを取り出すという操作が、最も高い能動性を示す発声と結びついた聴覚において遂行されるにはそれなりの理由がある。ビラン自身の語るところに聞けば、「発声と結びついた聴覚のはたらきは、他のいかなる協力もなしに自分の意志的活動のみによって、自分自身を様態変化させる modifier 直接的な手段を供給する唯一のもの」[58]だからである。そして、そこで取り出されるカテゴリーとは次のようなものである。まず、発声及びそれを聞くことにおいて、発声活動はその帰結（発声音）から分離されず、この両者の内に、私たちは「力」あるいは「因果性」の感情 le sentiment をとらえることができ、これらから「原因」とか「産み出す力」という観念が得られる。また、諸様態の持続において、「統一性」、「同一性」の観念が、そして諸様態そのものにおいて、「多数性」の観念が、それぞれ見出される。さらに、意志の活動によって続いたり中断したりする音と意志がもはや活動しない場合にも残り続ける音との対比から、「実在性」と「欠如」、「存在」と「非存在」の観念が、派生する[59]。

このように、ビランによれば、カテゴリーという名のもとに区別される諸様態一切は、適用されている諸項への意志的な活動の展開に内属していることになる。[59] つまり、そのような諸様態・カテゴリーは、意志的な活動の展開に先立つとか展開の外でというような仕方では、決して把握されない。それゆえビランにおいては、カテゴリーはア・プリオリなものではなく、「真実なる抽象」véritables abstractions である。[59] その意味は、感じられている諸様態が反省のはたらきによって抽象されるということにある。しかもこのようにして抽象観念が取り出されるのは、「私たち自身にのみ由来する活動」[60]の中だけであり、ビランにとって反省的抽象観念であるカテゴリーは、はっきりとその起源を確認することができるものである。

そこで私たちは、次に、反省的抽象観念（カテゴリー）について、他の観念つまりすでに見られた感覚様態の観念とあわせて、その厳密化を行なおう。

ビランによれば、反省的抽象観念は、単に反省的観念とも反省的抽象とも呼ばれ、その用語法に従う限り、反省の単純な観念から区別される。反省の単純な観念とは、「存在者[61]が自分の能動的存在について持っている感情から切り離せない根源的な自分の諸能力の第一のかつ最も単純な帰結[62]」とか「このもとに同一の人格存在 existence が連続的に覚知されている内密な様態」[63]と言われ、反省的観念がそこから抽象される活動の直接的帰結様態と理解される。[64] 力の感情という個人的な内密な様態から、力という観念が反省のはたらきによって抽象される。そして、内密な様態である反省の単純な観念が、厳密な個別性をつねに保持しているのに対して、反省的観念は、普遍化の特性をもつ。[65] したがって、反省的観念は、抽象という操作を介して、当初全く個別的であった自我の活動の直接的帰結様態と異なって、普遍性をもつことになる。では、この普遍性はいかにしてその妥当性を与えられることができるのだろうか。『心理学の基礎』では、反省的観念は「つねに普遍的で単純」[66]と言われ、さらにまた、この観念は「抽象の後にも、個別的で恒常的な同じ形式を保持する」[67]とされている。反省的観念は、観念を産み出す主体である自我の様々な活動において、常に同じ仕方で、同じものとして取り出される。言い換えれば、反省的観念の普遍性とは、「自我の様々な経験においていつも必ず」それとして見出されるという普遍性を意味する

ことになる。そうすると、少なくともこれまでの議論に従えば、ビランの言う普遍性とは、実在的な活動する自我の内面から取り出される普遍性であるにしても、個人の経験を越えて、他の人々にも普遍的に妥当するものとしてとらえられていると語ることの論拠を見出すのはむつかしいように思われる。[68] しかし、反省的観念が、反省という根源的活動に支えられて、自我意識の普遍的構造を表現する以上、それが任意なものであることは拒まれる。なるほどそれは積極的主張とはなりえないかもしれないが、しかしそこに客観的妥当性の契機をとらえることができると考えられる。

感覚様態の観念は、反省的抽象 les abstractions réfléchies と対比されて様態的抽象 les abstractions modales とも呼ばれる。[69] 諸々の様態を対象（あるいは器官）に帰属させるのは能動的触覚のはたらきであること、これはすでに明らかにされた。このはたらきのおかげで、問題の対象は、一なる実在的なものとしてたてられており、様態とその対象との間に因果関係がうちたてられ、これによって対象（あるいは器官）が「いかにある」のかがとらえられた。再びここで強調されるべきは、あたかも質料の流れのような諸様態[70]が一なる実在的なものの様態であることを確定するためには、すでに「一」という観念が必ず実在の領域から得られていなければならない、ということである。そして、「一」という反省的観念が質料に対して形相としてはたらいている、と言うことができる。それゆえ、様態的観念は、つねに反省的観念に依存的であると考えられる。一方、反省的観念は、「意識の本源的事実の真理そのものあるいは実在的統一性につねに結びついている」[71]し、「自分自身で、外部の諸事物への適用一切から独立な実在的で固有な価値を、享受している。」[71] したがって、形相としてのはたらきによって様態的観念にその固有な価値を付与する反省的観念は、活動する自我の内部で独自な価値を有しているから、ここで私たちは、一切の価値とか意味の発生源としての自我の活動がビランにおいてとらえられていることを、認めざるを得ない。こうしてまた、私たちはこの考察の最後に、ビランの以上のような思想の根底をなすと考えられる自我の活動性について、検討しておかねばならない。

四　自我の問題

ビランによれば、自我の感情は、私たちの個人的存在の事実そのものと異ならない。[72] それゆえ、自我の感情は感覚性の諸々の様態一切からも当然切り離されることがない。自我は、そのような諸々の様態と同一視されることはないが、それらの様態を「直接に作用を被る諸座としての自分の諸器官に関係づけることによって感覚する。」[73] さらに自我は、その諸々の様態を「対象に関係づけることによって知覚し perçoit」、またそれら諸様態を「主体あるいは産出原因としての自己に帰することによって、それらの内に自己を覚知する s'aperçoit。」[74] このように、感覚性の諸々の様態を感覚することから、対象の知覚と自己の覚知とが生じる。それゆえ、対象の知覚と自己の覚知という「対象的あるいは人格的な二重の内属関係また因果関係」[74]は、自我によって感覚されているあるいは知覚され覚知されている感覚性の諸々の様態の内に、基本的に介在することになる。

問題の関係、これをビランは、「私たちが諸現象についてもっている諸知覚の本質的な部分をなし、諸現象一切に私たちが必然的に広げてゆく産出的力あるいは原因の観念一切の模範となる型」と説明的に補うが、この関係の起源[75]は、また、私たち自身の内に探求されて、「私たちの個人的存在の本源的な感情 le sentiment primitif de notre existence individuelle」[76]と同一視される。もっともこれには条件があって、「適用された項への能動的な自己の展開によってのみ、またその展開を準備し実現するのに役立ちうる条件・手段の全体によってのみ、生きたものとなり自分自身を意識するようになる力の反省的把握」[76]において同一視されるのである。つまり、対象の知覚、自己の覚知という対象的あるいは人格的な二重の内属関係・因果関係は、自己の努力が適用される項・対象への能動的な自己の活動の展開のもとに把握される存在感情に起源をもつ。[77]

こうして、認識の主体としての自我の基本構造は、その能動的活動性に求められた。そして私たちは、この構造を「同一

性」の側面から補いたい。ビランによれば、自我を語ることによって「一」を語る存在者は、同じ結果をもたらす同じ能動作用をくりかえすことによって「一」を語ると言われる。[78] この「一」という観念の演繹にみられるように、自己の一性を保証するのは、同じ能動作用の反復的活動でしかない。[79] そして、自我が自己を「一」なるものとして覚知するこの能動的な活動において、自我はまた「自分をつねに同じものとして見出す」。[78] したがって、自我の同一性は、この能動的様態・あり方に内属している。[78]

ところで、能動的活動という経験において与えられているこの同一性を保証するものとして、ビランは、記憶という概念を持ち出すことを、決してしない。つまり、ビランにおいては、記憶によって保持されている一様態と感覚能力に現前しているもうひとつの様態との比較というような操作を通じて、自我の同一性を取り出そうとする考え方は、基本的にはない。[80] また『心理学の基礎』では、同一性が記憶の根拠であって、決してその逆ではないことを、ビランは明らかにしている。[81] そこで、ビランが積極的に語るのは、私たちにおける「力」の根源性である。私たちにおいては、諸様態の比較及び区別は、同時に連合されている多くの諸状況、諸知覚に基礎づけられており、この場合、注意は新たな感覚様態に適用されるが、その間も反省という根源的力はその感覚様態自体をそもそも産み出すのに必要な努力の展開の中ではたらいている。[82] 「意志し活動するのはつねに同じ力」であり、ここにはじめて、注意と反省の基礎ならびに諸様態の比較の基礎が求められることになる。[83]

私たちは、ビランによってこのようにとらえられた自我の同一性について、議論を深めよう。そしてこのとき、ビランがロックに見出す循環の問題を取り挙げることができる。ロックにとって、意志的運動と非意志的運動を分離する唯一の差異は、「魂が、生得的な自分の力によって、運動を自由に産み出す」ということにある、とビランは理解する。[84] そうすると、一方では、意志的な運動において活動しているのが魂だということは、この活動にともなう自由な努力の感情あるいは意識によって証明されるが、他方では、自由な努力の感情あるいは意識がある運動の実現に含まれていて他の運動には含まれて

いないということは、前者の場合にのみ魂が活動しているということによって説明されることになる。明らかに、ここには循環が成り立つと、ビランは考える。[84] しかしながら、循環に遭遇するからと言って、ビランはロックを批判しようとするのではない。この循環の深い意味をさぐることによって、魂に属している活動と意識の事実について、さらに明確に語れる場面を切り開こうとする。

意識の事実によって証明された魂の活動が、そのまま意識の事実を説明するとすれば、悪しき循環を免れることはできない。ところがビランは、一見悪しき循環に似て否なるものとして、「原理がひとつの事実だとすると、同種の諸事実一切の全体は、（中略）諸事実に同質的である最初の事実の中でのみ、他に探求を展開しないでそれらの説明を見出すことができる」[85] はずだと考える。魂という言葉が、感じられている自我の観念以外のいかなる観念も持たらさなければよいのである。そして、このときの原理は、「自我に帰されうる諸作用だけが、意識の事実の中で実際に自我が自分のものとしている諸作用である」[86] というものである。この事実は、それ自体によってしか説明されず、ビランはこれを「絶対的同一性」と呼ぶ。[86] ここに、魂とは感じられている自我に他ならないことになり、感じられている自我とは、意志的な活動にともなう努力の感情を感じている自我であるから、完璧な同一性が成り立ち、循環を語る余地はない。

同一性の問題を検討してきた私たちは、「絶対的同一性」という概念をもって結論を得たと言える。ビランにとって、自我の同一性とは、絶対的同一性であり、このことはそれ以上説明されることのない事実として承認されねばならない。自我は、活動することによって、いつも自分を同一的なものとしてとらえているのである。だからこそビランは、カテゴリーの演繹に際しても、「一」、「同一性」のカテゴリーあるいは反省的観念を直ちに活動する自我の意識の中から取り出すことができたのである。

ビランにとって、自我は、諸観念を産出する主体である。それゆえ、自我に先立っては何も語られないし存在しない。[87] この意味で、私たちの経験・認識を可能にする根拠としての自我が、ビランにおいてとらえられていることは、もはや明らか

である。そして、自我がこのように考えられていたからこそ、自我はまた知の源泉としてとらえられることができたのである。すでに見られたように、自我の能動的活動という実在の領域において、反省的観念及びそれに依存する様態的観念は成立する。それらは、ア・プリオリなものとしてたてられた観念でも、感覚能力を介して外部からやってくる出来上った観念でもない。[88] そして、様態的観念は、多様な世界を表現するが、その世界に意味や価値を供給するのは、反省的観念を介してそれを遂行する実在的な自我の活動なのである。

こうして、知は能動的な自我としか関係をもたず、この自我の活動に意味発生の場を見出したところにビランの発見はあったと言える。これがまた、私たちの論旨である。まず私たちは、感覚能力についてビランの行う分析を検討することによって、そこに能動性の視点が一貫して保持されていることに気づいた。そして、その能動性、言いかえれば自我の活動が世界に秩序を与えるものとして機能していることが、カテゴリーの問題を考えることによって明らかになった。自我の同一性についても、それが対象の同一性の基礎となることから、認識における根拠と考えられてもよいが、しかし自我の同一性そのものは、能動性に立脚するビランの思索の必然的帰結と考えるべきである。またビランは、自我の絶対的同一性を意識の事実というレベルにおいてしか問題としえず、ここに権利上の問題は介入しえない。これは、反省的観念を取り出す場合にも同様であり、ここにまたビランの「ア・プリオリ」を排し続ける立場を見ることができると思われるが、しかし再び確認されることは、ビランの究極の拠が自我の能動的活動にある、ということである。それゆえまた、「もし自我がそれ自身に生得的でないならば、何が自我たりえようか」[89] とビラン自身言わざるをえなかったのである。こうして、ビランによって経験的に取り出される知は、「ア・プリオリ」の問題に遭遇することになるが、この検討は、ビランの思索の範囲を逸脱する。それゆえ、この問題については、より抱括的な視点のもとに、あらためて考察を展開しなければならない。

註

(1) la classe des Sciences morales et politiques de l'Institut.

(2) 『心理学の基礎』 Essai sur les fondements de la psychologie et sur ses rapports avec l'étude de la nature, Oeuvres de Maine de Biran publiées par M. Pierre Tisserand Tome Ⅷ P.2. なお、本文中の引用は、すべてこの全集本によるものである。ところで、『心理学の基礎』(1812)は、『思惟の分解論』(1805)と、その根本的思索に関しては、異ならない。前者は、よりよく整理され体系化されている反面、マディニエの言葉を借りれば、「思想はより明晰だが、すでに以前に発見されているゆえあまり情熱は感じられない」 Gabriel Madinier, Conscience et Mouvement, P.106. 私たちは、本論において、より簡潔な概念規定を『心理学の基礎』から取る場合があることを、あらかじめおことわりしておく。

(3) 一七九九年六月一〇日付けで、学士院は次のような主題で論文を募集した。「思惟能力に及ぼす習慣の影響はどのようなものであるか限定すること、あるいは別の言葉で言えば、同じ諸作用の度重なる反復が私たちの知的諸能力の各々に対して産み出す効果 l'effet を示すこと」

(4) Tome Ⅷ P.4.

(5) ビランは、受動と能動の対立概念を何通りかに表現している。例えば、感覚性 la sensibilité と運動性 la motilité、受動性 l'affectivité と意志性 la volonté あるいは能動性 l'activité。なお、l'affectivité は、外部から作用を被る être affecté という受動性を意味する。

(6) ビラン自身、「第二の仕事」ce second travail と呼んでいる。Tome Ⅷ P.4.

(7) Tome Ⅷ P.5.

(8) Tome Ⅷ P.3.

(9) マディニエによれば、ビランは、意志的なものの直観をもっていた。それは、理論的に明晰な意志的なものの概念ではない。そうではなくて、打ち勝ちがたい力と絶対的な確実さとをもって、生きられ経験された意志的なものの感情である。前掲書 P.102.

(10) ビランにおいて、活動 acte は能動 action である。以降、私たちが活動という語を用いるとき、必ずそこには能動性が含意されている。

(11) Tome Ⅲ P.44.

(12) Tome Ⅲ P.132. ビランは、感覚性の諸様態の中に、それら諸様態に対応するいくつかの器官の自然発生的なはたらき le jeu spontané（ビランの場合、spontané は、器官にのみ適用される形容語であり、意志性とは無関係である）とか感覚様態（これについては註(18)参照）の質料たりうるようなものを探求し、努力というひとつの同じ力の能動性の所産の中に、最初の意識事実に対応する諸条件とか、自分の活動、様態、観念を思惟したり覚知したりする能力を与えられている人格が存在する全形式の源を探求する。

(13) いわゆる五感のことである。しかし、ビランは、嗅覚については十分な分析を行なっておらず、味覚に至っては全く言及しない。これについては、ビラン自身、諸々の感覚能力から知的な諸能力が派生する秩序を問題とする場合には、嗅覚及び味覚の諸機能についての分析は省かれることができる、としている。Tome Ⅳ P.50 note これら二つの感覚能力は、それほど受動的なのである。

(14) したがって、私たちは、この第二部門の考察を完璧に遂行することによって、第一部門が明らかにした二要素に当然到達するはずである。それならば、第一部門の考察は、第二部門に解消されてもよいように思われる。これがまた、すぐ後に筆者が明らかにするように、第二部門を中心的に扱ってよいと考える理由の一つでもあるのだが、しかし、『思惟の分解論』がこのような構成をとっていることについては、ビラン自身の説明を聞くことができる。「諸々の感覚能力のはたらきの中ですでに組み合わされている諸結果あるいは諸帰結から出発することによって、同様に私たちは、それら産出的諸要素を見出す retrouver ことができたであろうし、より真に分析的な歩みによってそれらの要素にまで降りてゆくことができたであろう。しかしもし、それらの要素をその単純で分離された諸条件の内で記した後に、それらの要素から形成される様々な複合体の中にそれらの要素を見出すことに私たちが到達するとすれば、私たちは、実在的な分析の対象により十全的に到達したということになりはしないだろうか。」Tome Ⅲ P.242.

(15) Tome Ⅳ P.52.

(16) Tome Ⅳ P.53 entendre ではなく écouter という言葉によってあらわされる場合、意志作用の積極的介在が明らかにされている。

(17) Tome Ⅳ P.54.

(18) ここで、感覚様態と訳した sensation は、意識の変状 modification であり、単に外部からの刺激によって引き起こされる状態ではなく、意志的なエレメントが介在する複合的所産である。Tome Ⅲ P.124～135. また、『心理学の基礎』では、感覚様態とは、自我が受動的にのみ参与する複合的な最初の様態と述べられる。Tome Ⅸ P.280.

(19) Tome Ⅳ P.55.　(20) Tome Ⅳ P.56.　(21) Tome Ⅳ P.57.　(22) Tome Ⅳ P.58.

(23) Tome Ⅳ P.62.　(24) Tome Ⅳ P.72.　(25) Tome Ⅳ P.51.

(26) 子供は、泣くこと（自然に発した音声）において、このことを意志的に模倣しはじめる。このことは、外からやってくる音を模倣するのに先立つ。ここにおいて子供は、自分を「原因」ととらえることができ、また聞き取られた諸様態の中で「結果」としてある自分を覚知することができる。意志的な発声活動・模倣活動において、因果性の本源的関係が基礎づけられている秩序がとらえられる。Tome Ⅳ P.68.

(27) Tome Ⅳ P.79.　(28) Tome Ⅳ P.79～80.　(29) Tome Ⅳ P.81.　(30) Tome Ⅳ P.83.

(31) Tome Ⅳ P.85.　(32) Tome Ⅳ P.86.

(33) この節の表題 Tome Ⅳ P.85.　(34) Tome Ⅳ P.90.

(35) このようなことは、「私たちの思惟の秘密」を「外的な対象」のもとに尋ねることでしかない。Tome Ⅳ P.90.

(36) Tome Ⅳ P.105.　(37) Tome Ⅳ P.106.　(38) Tome Ⅳ P.122～3.

(39) Tome Ⅳ P.123.　(40) Tome Ⅳ P.130, 134.　(41) Tome Ⅳ P.133.

(42) 物体の本質を構成するのは、私たちの意志的な活動に対する抵抗力であり、物体世界は力を本質とする世界として厳密にとらえられる。Tome Ⅳ P.107.

(43) Tome Ⅳ P.130.　(44) Tome Ⅳ P.129.　(45) Tome Ⅳ P.134.

(46) 『心理学の基礎』では、色は第二性質として明記される。Tome Ⅸ P.395.

(47) Tome Ⅳ P.129.

(48) ちなみに、抵抗する連続体を自我の外にたてることは「実体的帰属」とされる。Tome Ⅸ P.385～397.

(49) Tome Ⅸ P.395.　(50) Tome Ⅸ P.394.

(51) ビランは、能動的触覚の役割として「対象を与える」ことを挙げるに留まっており、それ以上説明を展開していない。Tome Ⅳ P.129.

(52) ここにまた、ビラン後期の思索において、あらためて「信憑」の問題が取りあげられることになる所以があるのであろう。

(53) Tome Ⅳ P.159.　(54) Tome Ⅳ P.158.

(55) Tome Ⅳ P.157～8. 具体的な検討は P.169～243.

(56) Tome Ⅳ P.158.　(57) Tome Ⅳ P.201～224.　(58) Tome Ⅳ P.75.

(59) Tome Ⅳ P.74.　(60) Tome Ⅳ P.74～5.

(61) ビランは、感覚的運動的存在者としており、知的存在者よりも許容範囲を広げている。Tome Ⅳ P.47～8.

(62) Tome Ⅳ P.48.　(63) Tome Ⅳ P.75.

(64) ただし、この抽象という操作は、知的存在者にのみ限られる。註の(61)参照。

(65) Tome Ⅳ P.75.　(66) Tome Ⅶ P.268.　(67) Tome Ⅶ P.267.

(68) そもそも、他者の問題は、ビランのテキストには出てこない。

(69) Tome Ⅳ P.73.

(70) 「いかなる対象にも結びつくことなく、私たちの疲れた目の前を時としてただよっている色のついた雲状のもの」Tome Ⅸ P.394.

(71) Tome Ⅶ P.269.　(72) Tome Ⅲ P.232.　(73) Tome Ⅲ P.232～3.　(74) Tome Ⅲ P.233.

(75) ビランは、この関係が、生得的でなく、起源をもつことを重視し、そのことを論証している。Tome Ⅲ P.233～5.

(76) Tome Ⅲ P.235.

(77) ところで、自我の自己覚知は対象の知覚なしにも成立しうる。ビランの挙げる例に従えば、闇の中で目を見開くとか、静寂の中で耳をそばだてるとかいう状況の中では、外部からの印象一切から切り離されて、「純粋な人格的要素」がとらえられる。Tome Ⅲ P.238.

(78) Tome Ⅳ P. 47.

(79) 存在者は、「自分がはたらかす能動作用及びそこから帰結する最初の様態においては、自己の一性 son unicité の観念あるいは感情をもつことなしには、自己を覚知しえないし、自我として構成されえない。」Tome Ⅳ P. 47.

(80) Tome Ⅳ P. 40.

(81) Tome Ⅸ P. 322.

(82) Tome Ⅳ P. 40～41.

(83) Tome Ⅳ P. 41. なお、注意と反省とは、「原因の中では同一的な二つの活動」と言われる。

(84) Tome Ⅲ P. 192.

(85) Tome Ⅲ P. 192～3.

(86) Tome Ⅲ P. 193.

(87) 「自我に先立っては、知は決してない。というのも存在は決してないからである。」Tome Ⅶ P. 270.

(88) いずれの場合も、受動性のエレメントしか見出せない。Tome Ⅶ P. 25～6.

(89) Tome Ⅸ P. 351.

（本学大学院博士課程・倫理学）